イタンガタリ

ちょこぴ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
イタンガタリ

【Ｎコード】
Ｎ４６１２Ｗ

【作者名】
ちょこぴ

【あらすじ】
異端な者達が
異端なことを
異端な方法で
解決する

僕の彼女は日本刀（前書き）

異端な物語が始まる

僕の彼女は日本刀

「人殺しぃぃ～」
僕を見た見知らぬオバサンが叫ぶ。僕の足下には生命を失った器、女性の屍。僕の手には刃が剥き出しの日本刀。ついでに言えば、オバサンの手には葱が突き出したスーパーの袋。
「違うんだけどなぁ」
頬を掻きながら、呟く。確かに状況的証拠だけで言えば限りなく僕は黒だろう。誰もが疑うのは無理はない。僕の説明、僕の言い分は普通の極一般的な人間には信じてもらえないだろう。だから、僕は無駄なことはしない。
「僕が殺人鬼だと思うなら」
僕はゆっくりとオバサンへと歩み寄り、微笑みを浮かべる。
「逃げた方が」
そこまで言った時、オバサンは僕の想定の範囲から大きく外れた行動をとった。スーパーの袋から取り出した一眼レフの立派なカメラを僕に向け、シャッターを押した。フラッシュが一瞬、僕の視界を奪った。
「……」
視界が正常に戻ると、オバサンの姿は消えていた。
「スーパーの袋になんでカメラなんか」
苦笑。もう苦笑いするしかない。殺人鬼と疑われ、写真を撮られた。つまり、いつかきっと僕は指名手配。もしくは、それに準じた処置をとられるだろう。僕は容疑者か、それを通り越して犯人か。
「どうしようか、真理亜」
日本刀を投げながら、僕は問い掛ける。虚空を円書いて廻る日本刀は蛍のような優しい光を放ちながら、次第に人間の形となり、メイド服姿の美少女へと姿を変えた。
「餅は餅屋。蛇の道は蛇」

美少女、真理亜は冷たく言い放ちながら、地面に落ちていた紙を拾い上げた。人形のように無表情で、整った顔立ちを僕に向けながら、その紙を差し出してきた。
「え～っと」
真理亜に見惚れているせいか、彼女の言いたいことが分からない。だけど、とりあえずは紙を受け取った。
「程々探偵事務所……なるほど」
紙に書かれた内容を読み上げ、それで僕は真理亜の意図を理解した。
「真犯人を探偵に捕まえてもらおうと」
「ロリコン馬鹿にしては物わかりが良い。それよりも、この紙から私と似たような匂いがする」
「同じ匂い……」
「同じではない。あくまで同じような匂い」
真理亜の言葉を聞きながら、僕は思考を巡らせる。真理亜と同じようでいて、探偵。適している。この問題を解決してもらうには、とても適している。真理亜が同じような匂いがすると言うのだから、この程々探偵事務所は普通ではないのは確実。
「行きましょうか」
紙に書かれた地図を見る限り、場所は直ぐ近くだ。迷うことなく行けるだろう。
「貸しなさい」
乱暴に、だけど力は強くなく、真理亜は僕から紙を奪い取った。
「お前は方向音痴なのだから、私に任せない。無自覚なのだから、たちが悪い」
淡々と真理亜は言いながら、緩慢な足取りで歩きだした。
「方向音痴じゃないと思うんだけどなぁ」
だけど、僕は真理亜に逆らうことはせず、彼女の後を追い掛けた。

僕の彼女は日本刀（後書き）

異端な物語は終わらない

依頼（前書き）

異端から異端への依頼

依頼

「ここね」
真理亜の言葉を疑ったことなど一度もない。だから、今も僕は疑わない。信じよう。アパートの一室、ここが程々探偵事務所だという彼女の言葉を。看板もなにもないが、ここが程々探偵事務所なのだろう。
「よし」
僕は早速、何の躊躇いもなく、呼び鈴を押した。チャイムの音が玄関越しに微かに聞こえる。中からの反応を待ちながら、僕は探偵への説明の内容を頭の中で構築を始めた。
どれ程経っただろう。取り敢えず、チャイムを聞いてから直ぐに対応したとは思えないくらいに時間は経過しただろう。ゆっくりと、玄関が開いた。全開ではなく、微かに。僅かな隙間から、顔だけを出して、青白い顔をした金髪の男が僕と真理亜を交互に見た。
「ちっ、男連れか。まぁ、良い。入れ。客だろ？」
男は扉を開き、渋々といった様子で僕達を招き入れた。接客態度というか、対人能力に問題がありそうな男だ。
「お邪魔します」
男に従い、僕と真理亜は部屋へと入った。靴を脱ぎ、部屋に上がる。中は普通のアパート。まずキッチンがあり、その先に2つの扉。その片方に小さく、殴り書きの文字で書かれた「程々探偵事務所」という看板が掲げられていた。
「こっちだ」
看板のある扉へと向かい、その前で振り返って男は僕と真理亜を見た。
「そっちの部屋には入るなよな」
男は青白い顔のまま看板のない部屋を示し、僕達を睨んだ。
「何が居る？」

部屋に入って、というか、男と出逢ってから、初めて真理亜が言葉を発した。
「お前には関係ない」
「なるほど。お前は普通の人間か」
真理亜の言葉に男の右眉が微かに歪んだ。
「まぁ、今は良い。入ろうか」
「ちっ」
真理亜に、男は隠す様子もなく堂々と舌打ちで返した。不満そうに、苛立った様子で、それでいて、病弱そうな表情のまま、扉を開けた。勿論、看板のある方の部屋を。
「好きな所に座れ。家具だけじゃねぇ、お前らに出すお茶やコーヒー、ジュースもねぇからな」
確かに、何もない部屋だ。畳とカーテン、それくらいだ。男は部屋の中央辺りに胡座で腰を降ろした。
「……」
真理亜が無言で正座をするのを確認し、僕も男のように胡座をかいて座った。「依頼の内容を聞く前にまず自己紹介だな。俺の名前は政宗。竜童政宗だ。好きなものは男のいない女、嫌いなものは男のいる女とマシュマロ。この程々探偵事務所で助手をしている」
淡々と、投げやりに、男は名乗った。
男、竜童政宗さんが助手ということは他に探偵が居るということか。ここが事務所で、隣の部屋には誰か居る。となれば、隣に居る何者かが探偵である確率が高い。だとしたら、何故この場に来ないのだろう。依頼人である僕達に会わなくて良いのだろうか。
「助手だからと言ってもそこらの探偵より優秀だから安心しろ」
「そ、そうですか」
僕の心を見透かしたかのような政宗さんの言葉に驚いたが、大きく息を吐いて気持ちを落ち着ける。
「僕は黒峯遠矢。職業は高校生ってことになるんでしょうか。好きなものは剣と真理亜。嫌いなものは今すぐは思い付きません」

言った後で思った。依頼するのに好き嫌いを伝える必要はあるのか。政宗さんが言ったから自然と自分も言ってしまったが……。
「師走真理亜」
真理亜はそんな僕の考えを知ってか知らずか、無愛想に名前だけを告げて、口をつぐんだ。
「遠矢に真理亜か……じゃあ、肝心な話に移ろうか」
政宗さんは真理亜の性格を理解したのか、僕に返答を求めるように視線を向けてきた。
「依頼のことですが、簡単に言えば僕の冤罪を晴らしてください」
「詳しく話せ。依頼を受けるかどうかは、それから決める」
政宗さんの言葉に従い、僕はゆっくりと先程あったことを話し出した。普通は信じてもらえないような話も含まれているが、政宗さんならば信じてくれると思うから。

依頼（後書き）

依頼の行方は……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4612w/

イタンガタリ

2011年9月7日03時17分発行